Newsletter

2015 | 夏 |

特定非営利活動法人ジェン
Vol.61

人びとに寄りそって。

4月25日に発生したネパール大地震。
現在もなお、
わずかな支援さえ
届いていない地域があります。
そこはまるで、たった今
地震が起こったかのようです。
支援から取り残されがちな
女性や子ども、少数民族を対象に、
JENは、支援を行っています。

特定非営利活動法人 JEN　Newsletter　Vol. 61　2015年07月20日発行

ネパール大地震 緊急支援を開始

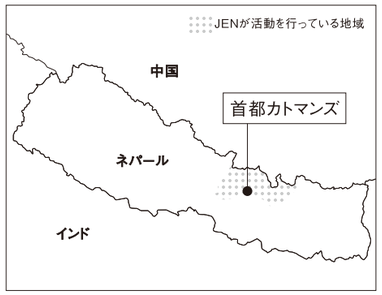
ネパールで4月25日に発生したマグニチュード7.8の地震により800万人※1が被災し、8700人以上※2が亡くなりました。

高い山々に囲まれたネパールは、もともとインフラが整っておらず、支援物資を1～2日かけて徒歩で届けるようなこともしばしばで、現在も必要最低限な支援さえ届かない地域があります。人びとは未だテントで寝泊まりし、蓄えていた食糧を少しずつ食べて凌ぐなど、生活を立て直すための支援を必要としています。

そこでJENは、支援がいまだ届いていない地域の約2800人に生活必需品や雨季やこれからやってくる冬に向け必要となるトタン板や毛布などの配布を行います。また、農業を生業としてきた人びとの生計回復をサポートするために、農機具の配布も検討しています。

さらに、地震の記憶によりトラウマを抱えてしまった児童へ、文房具とスポーツ用具を配布し、復学支援を行います。子どもたちの教育を受ける機会の提供と、友達と会ったり、スポーツで汗をかくことで、彼らに本来の明るさを取り戻してもらいたいと願っています。

出典／国連人道問題調整事務所（UNOCHA）より。※1 2015年4月時点 ※2 2015年6月時点



Nepal ネパール

○国名：ネパール連邦民主共和国○首都：カトマンズ○人口：2,649万人（2011年、人口調査）○面積：14.7万平方km○人種・民族：パルバテ・ヒンドゥー、マガル、タルー、タマン、ネワール等○言語：ネパール語

出典…外務省ホームページより。2015年3月時点

テントの仮設教室で勉強する子どもたち。

家が全壊してしまった女性とその家族。

現地駐在スタッフからのレポート

レンガ造りの家屋はがれきの山となった。

ネパールの首都カトマンズから車で40分。甚大な被害を受けた村を訪問しました。この時すでに地震から2か月が経っていましたが、道には瓦礫があふれ、埃が立ち込めており、被害の大きさを物語っていました。

「カトマンズでは、家屋の70%が半壊か全壊、学校もほぼ全壊しました。地震が土曜だったのが不幸中の幸いです。もし、平日だったら多くの子どもが亡くなっていたと思うとぞっとします」と現地NGOのプラティバさんは言います。地震で娘と孫を亡くした女性は「貧しくても、家族一緒に前の生活に戻れるなら、何もいらない」と悲しみに暮れています。人びとは、余震への恐怖、観光客の激減による今後の生活への不安を口にしています。そんな状況でも、山積みの瓦礫を一生懸命に片づける若者達の前向きな姿に胸を打たれました。

人びとが一日も早く立ち直れるように、同じく大地震を経験した者としてできる最善を考えながら、支援活動を行ってゆきます。（原口珠代）

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。
最大で約40%が所得税の税額控除となります。

※控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。

生きるちから マンスリーサポーター
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの、生きる力をサポートします。

遺贈寄付
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。

郵便局から
00170-2-538657
口座名 **JEN**

インターネットから
クレジットカードでご寄付いただけます。
（VISA、MASTER、JCB、AMEX）

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。

JEN
Japan Emergency NGO

特定非営利活動法人ジェン（JEN）
東京本部事務局
〒162-0824 東京都新宿区揚場町2-16 第二東文堂ビル7F
TEL：03-5225-9352　FAX：03-5225-9357
E-mail：info@jen-npo.org
ホームページ
http://www.jen-npo.org　NPO JEN　検索

ザータリ難民キャンプの人と人をつなぐ、雑誌「THE ROAD」

ザ・ロード

広大なザータリキャンプで情報を共有できるように

「難民キャンプで昔の友達に再会できて、とても幸せです」と語るのはザータリ難民キャンプに住むアブ・サマーさん。「雑誌『THE ROAD』に友人の写真を見つけた時は、本当にびっくりしました」。

約8万人のシリア難民が暮らし、6㎢（東京ドーム約128個分）、12ものエリアに区分される広大なザータリ難民キャンプ。ここには公共の交通機関がないため、人びとの移動手段は極めて限られています。そのため他の地区の住民との交流の機会や支援団体が提供するサービス、イベント等の情報を得る事は簡単ではありません。そのため、住民が円滑に情報を得られ、かつ発信できる仕組みを作る事が喫緊の課題でした。そこでJENは、住民が中心になって難民キャンプの情報を発信する雑誌発行のサポートを始めました。それが、アラビア語の雑誌『THE ROAD』です。

雑誌の制作を通じて若者の夢をサポート

JENは、この雑誌刊行によって住民同士のネットワークの構築だけではなく、難民キャンプに住む若者の夢をサポートしたいと考えています。住民の50％以上を占める、17歳以下の若者が教育に接する機会は、十分ではありません。学校の数が足りない、遠い、親が病気だ…等、理由は様々です。加えて難民キャンプには高校がない為、中等教育より先に進むことができません。さらに、仕事に就こうと考えても、ここで得られる仕事は数や職種も限られています。このような状況から、彼らには、無力感や倦怠感、将来に対する不安が募っています。

これらを改善する為、JENは、若者のために雑誌制作の職業訓練と実践の場を設けました。これまでに300人を超える若者が、企画・取材・撮影・執筆・デザインなどの雑誌編集に携わりました。執筆時にはプロの編集者が指導にあたり、デザイン時にはプロのグラフィックデザイナーが訓練生と一緒に考えます。

この活動を通して、彼らの創造力やチームワーク、リーダーシップが養われる事を期待しています。そして、彼らが自信に溢れキラキラと輝く姿が、他の若者や子どもたちに良い刺激を与える事がなによりも重要です。なぜなら、そういった若者や子どもたちこそが将来のシリア再建の原動力なのですから。

アンケートによると96％がこれからも読み続けたいと回答している。「レシピのページが楽しみ」と女性たちの声も。

雑誌「THE ROAD」の中から、記事をご紹介します。

MY STORY ｜マイ・ストーリー

1 紛争によって親友と離れ離れになり、友達の有難さを改めて感じた、というサマーさん。彼は今ボランティアで、キャンプ内の若者が新しい友達を見つけられるよう活動しています。例えば、サッカーが好きな人を見つけたら、同じ趣味を持つ他の地域の若者を紹介しています。悲しみや憂鬱に襲われる事があっても、友達がいればきっと助け合ってゆけると彼は考えています。（写真上）

2 「洋服を売って、少しですが収入を得ています」と嬉しそうに話すのは、ネーマさん。「孫や娘の生活が少しでも良くなればと思って。それに、一日中仮設住宅にこもっているよりも、こうして働いている方がずっと良いですね。人生に少しでも意味を見いだせると思います」。（写真中）

VOICE FROM ZA'ATARI ｜ボイス・フロム・ザータリ

シリアで生まれ、育ち
思い出も、友達も、そこにある
夢もそこに、あった
「どうしてそんなに恋しがるの」なんて聞かないで
僕の故郷は、そこしかないんだ
ああ、大好きなあの家で、あなたにコーヒーを入れてあげたい

〈作 ハウラ・アブド〉

雑誌「THE ROAD」
いつか故郷に帰る「道」が名前の由来

○あなたも一緒に、この雑誌プロジェクトをサポートしませんか?
○ジャーナリストの方、このトレーニングの講師になりませんか?

［お問い合わせ先］
JEN本部 03-5225-9352

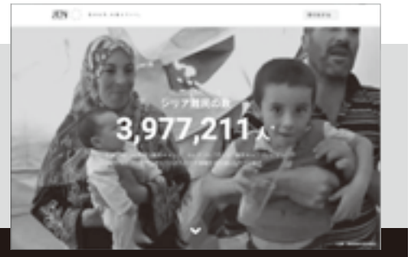
『THE ROAD』を通じて、夢を追いかけています。

ジャーナリズム訓練生　モハマッドさん（19歳）

僕の夢はジャーナリストになることです。難民キャンプで行われるイベントの中に、ジャーナリストに通じるようなものがないかと、探していました。『ジャーナリスト育成トレーニング』の存在を知った時には、心が躍りました。記事は正確かつ客観的であることが必要で、個人を利するものであってはいけない、ということを常に心がけています。

知ってほしい。シリア難民のこと。

シリアから周辺国に逃れている難民は、今や400万人に届く勢いです。その現状を知ってください。JENでは、シリア難民支援の特設サイトを開設、ヨルダンのザータリ難民キャンプに生きる人びとのストーリーを紹介しています。下記のURLに、ぜひアクセスを。



http://www.jen-npo.org/cp/syria/　NPO JEN　検索

パキスタン

避難先でも尊厳のある暮らしを

2012〜13年には、デラ・イスマイル・カーン県にて妊娠したヤギの配布なども行いました。妊娠したヤギからはミルクがとれ、それを売り収入源にすることもできます。

飼料、給餌・給水用バケツなど家畜保護の為のキット。

一人ひとりに物資が行き届く様に引換券とリストをしっかりと確認します。

パキスタンの連邦直轄部族地域（FATA）で、昨年6月以降続く反政府武装勢力掃討作戦によって、約26万世帯の人びと※が、避難を余儀なくされています。彼らの多くは、公共の建物、親戚の家などに身を寄せ、故郷から連れてきたヤギなどの畜産で生計を立てていますが、『飼料価格や医療費が高く、飢えや病気によって家畜が衰弱してしまう』、『苦しい生活の為に家畜を売ってしまう』など、希少な収入源である家畜を維持できていませんでした。そこで、JENはバンヌー地方へ家畜と共に避難してきた世帯を対象に、家畜の飼料・飼育道具の配布、予防接種、避難民などで構成する『生計回復委員会』の設立サポートなどの活動を行っています。

ラシッドさんもそのうちの一人です。12人の家族と10頭の家畜を連れて戦闘から逃れ、徒歩で隣接するバンヌー地方の避難民キャンプにたどりつきました。家畜を飼育するために知人に餌を分けてもらいましたが、厳しい環境の中、3頭の家畜を失ってしまいました。悲しみに暮れていたその時、JENの支援を受ける事になりました。「家畜が元気になって、搾乳量が1.5倍に増え、大好きな乳製品も毎日食べられるようになったよ。JENの支援で予防接種を受ける事ができたし、家畜の育て方も指導してもらったから、不安な気持ちも軽くなったよ」とラシッドさんは嬉しそうに話します。

パキスタン北部では不安定な治安状況に加え、度々やってくる自然災害により、人びとの生活は困窮を極めています。JENは、2005年より、教育や生計回復、水・衛生などの各分野で支援活動を行ってきました。施設整備や物資配布のみならず、研修や委員会設立のサポートなどを通して、人びとが自分のコミュニティを自分たちの手で再建し、支えていく仕組みを作ることを目指しています。

※出典…UNHCRより。2015年5月時点

家畜への予防接種。これによって、口蹄疫、陽性毒血症などの病気から家畜を守ります。

イラク

自分たちの力で避難民キャンプをよりよい場所に

コミュニティ衛生プロモーターの会議。どうやって住民の衛生意識を高めるか、熱い議論がくり広げられます。

各世帯に1つ、ごみ箱を配布しました。ふた付きのごみ箱は害虫の繁殖を抑えます。

長期化する紛争により、イラクの国内避難民の数は約360万人※にのぼっています。JENは、激化する紛争から北部クルド人自治区の避難民キャンプに逃れてきた人びとを対象に、緊急支援を行っています。

避難民キャンプでは、支援を受ける側の住民がいかに自身の置かれている状況を良くしようと思えるかが、活動成功の鍵になります。ごみ問題はその良い例です。住民にごみ箱が配布されても、ポイ捨てをやめ清潔に保てるかどうかは住民次第です。JENが有志ボランティアを集め、『コミュニティ衛生プロモーター』のトレーニングを行うのは、住民が主体となってキャンプを良くしようとする動きを促すためです。

私たちがごみ箱の配布を検討していたある日、ボランティアの一人が「ごみ箱さえあればこのキャンプをクルド人自治区の中で一番きれいなキャンプにしてみせる」と言いました。私たちはこの言葉を聞いた時、配布を決断しました。避難民キャンプはそこに暮らす住民自身のものであり、その環境を維持改善していこうという取組みを支えるのがJENの仕事なのです。

※出典…UNHCRより。2014年12月時点

東北

街を元気に。しくみづくりをサポート

地域の人びとの話を聞き今の東北を直に感じる事は風化防止にも。

宮城県北部の南三陸町は、震災後、多くの人が町外に流出し、地域産業の継続が一層深刻な問題となっていました。

そこでJENは人口流出による人手不足と、企業の社員研修のニーズを組み合わせ、漁業従事者を対象に生計回復支援を行って来ました。企業にとってこの研修は、1週間の漁業体験を通し、社員の自主性や協調性、ボランティア精神を磨ける場です。一方、受け入れ側の地域住民は、「被災地で頑張る姿を外部に伝える事が、漁業を続ける励みになっている」と、言います。

2012年にこのプロジェクトが始まった頃は戸惑っていた地元の人たちも、3年間の経験が自信となり、指導方法も年々工夫を重ねているため参加者にも好評です。4年目となる本年は、地元の観光協会が漁協と連携し、地域住民が主体となって継続的に受け入れる、新たな体制を作ります。

JENはこの取組みが軌道に乗り、継続できるよう応援していきます。

ハイチ

衛生知識の浸透による住民の意識変化

毎年3月22日は「世界水の日」。各国で様々なイベントが行われます。

皆さんは「世界水の日」を知っていますか？この日は、水資源の重要性について考える日で、ハイチでも衛生促進イベントを行いました。ハイチでは、コレラの流行が大きな問題となっています。この約5年間に約74万人が感染し、8768人もの人びとがコレラを原因として亡くなっています※。要因は、きれいな水が手に入らない事、適切な衛生施設の不足、そして衛生知識がない事です。コレラや下痢の予防について楽しみながら学んでもらえるように、水衛生のクイズ大会を開催しました。正解者には水の浄化剤のプレゼントつきです。

これまでの衛生促進活動や今回のイベントが功を奏したのか、水を汲んだバケツに汚染物が混じらないように蓋をする姿など、住民の意識に変化が見えてきました。この活動の目標に住民の意識が近づいていくと、スタッフたちは手ごたえを感じています。今後も地域に貢献できるように、引き続き活動を行っていきます。

※出典…UNHCR国連ハイチ事務所より。2010年10月〜2015年3月の統計

アフガニスタン　マムードゥ校長へのインタビュー

すべての子どもたちに学ぶ機会を

イマム・アザム高校校長のフォアジャ・マムードゥさん（左）。1957年パルワン県生まれ。6人の子どもの父でもある。

2012年にJENが建築した校舎で。マムードゥ校長とJENスタッフ。

かつてのアフガニスタンは、平和で豊かな国でした。農家に生まれ、学ぶことが大好きな少年だった私は、カブール大学で法律を学びました。そして、80年代に入ると、当時のソビエト連邦が攻めてきました。多くの一般市民が犠牲になり、生き残った人びとは、より安全な住処を求めて避難しました。

私たち家族も83年に隣国イランに避難し、90年代に帰還を果たしました。その後、私は高校で教鞭をとるようになり、JENの活動に出会い、子どもに衛生知識を教えるようになりました。

先日、私の庭に実ったリンゴを学校に持って行きました。職員の一人がそのリンゴを食べようとすると、ちょうど居合わせた生徒が「先生、洗わないで食べると病気になるから、洗った方が良いよ」と言いました。私は、この生徒の言葉に感心し、また衛生教育の効果を実感して、とても嬉しくなりました。国内では、不安定な情勢が続いていますが皆様のご支援により、学校が衛生的になり、安心して学べるようになりました。

アフガニスタンの全ての子どもが教育を受ける機会に恵まれることが、私の願いです。

Sri Lanka
スリランカ

コミュニティを私たちの手で再建していく。

スリランカの内戦は、7万人以上※が犠牲となり、国内だけでも約28万人※もの人びとが安全な場所を求め逃げまどうという厳しいものでした。26年にわたった内戦終結後にやっとの思いで戻った故郷ですが、6年が経った今も紛争によって家や財産を失った人の多くが、経済的、精神的に不安定な生活を送っています。JENは、農業用井戸の建設や農業技術ワークショップなどを通し、厳しい生活を改善するための支援を行う他、農業協同組合の設立から運営をサポートするなどコミュニティ再建と自立を促しています。

※出典…外務省ホームページより

スリランカ東部・北部の各地で行っているJENのワークショップの風景。

ベイルブルレイ・アンナレチュミさん〈農協参加歴 5か月〉

農協活動を通して気持ちが前向きに。

「1年半前、4人の子どもたちと一緒に故郷に帰ってくると、家も、農園も、井戸も全て壊されていました。夫は避難中に亡くなり、途方にくれました。数か月前に住居が支給され、庭にはJENの支援で農業用の井戸が出来ました。やっと安心して住むことができます」。気持ちも少しずつ前向きになり、JENがサポートする農協の活動に参加し始めた彼女。地域の住民と一同に会せる農協の活動は、心安らぐ時間でもあります。

「JENが実施する野菜や有機農薬の作り方の研修を受け、庭で野菜を栽培しています。今、生活は厳しいけれど井戸が完成したからもっと栽培して収入を増やしたい」。今の夢は、『娘たちを大学に入れること』。将来への希望は、自分の力で未来を切り開いていく力になります。

カルナカラン・ジェヤランさん〈農協参加歴 2年〉

交渉術を学び、自信を身につけました。

「以前は、交渉する術を知らなかったので、一生懸命に作った農作物を仲介人に買い叩かれ、悔しい思いをしてきました。でも、JENのマーケティング研修に参加して、交渉術を学びました。今では、農協のメンバーと協力しながら業者と交渉し、正当な価格で販売できるようになり、収入も上がりました」。研修では、『消費者のニーズを探る』『商品の開発・差別化』『適切な販売場所を見つける』など、マーケティングの基本を学びます。

「今、私たちはコンポストで作った有機肥料の商品化を行い、業者との交渉を進めています」と自信に満ちた笑顔の彼女。「紛争の後、普通に外に出る事ができて、学べて、沢山の人にあえること…そんな事がとても嬉しいです。平和な日常が何よりも大切だと実感しています」。

事務局長 木山啓子とJENスタッフの
往復書簡
oufuku syokan
イラク ▸▸▸ 日本

修復された水道設備で、手の洗い方を生徒に教えるティクラさん。
JENは、学校設備の修復と衛生教育を行っています。

Airmail

啓子さんへ

私の近況をお伝えしようと筆を執ったら、昔を思い出しました。私の人生の中で平和に満ちていた頃を。学生時代、スポーツイベントに参加したこと、両親や兄弟と暮らしていたこと、優しい夫と結婚したこと…。

今の生活は、そんな平和な毎日からは一変しました。例えば、時間通りに職場に着く事もままなりません。毎日のように、治安問題、爆発などのテロ、宗教行事などで通勤路が封鎖されているのです。友達に会ったり、買い物に行く事さえ難しくなっています。そして、たとえ楽しい時間を過ごせたとしても、このイラクの状況を考えると、心から楽しめていない自分がいます。

1980年以来ずっと、私たちは様々な戦闘と隣り合わせで暮らしてきました。8年に及んだイランとの戦争、湾岸戦争、多国籍軍によるフセイン政権打倒を目的とした戦闘…。そして、イラクは政治的にも、経済的にも、社会的にも完全に破壊されてしまいました。今は武装勢力ISが国の広い範囲を占拠し、政府軍との戦闘が絶えません。

将来への希望を持てず、ただ今日の日を過ごしています。通勤中や市場へ行く時に、手製爆弾や自動車爆弾で怪我をしたり殺されないようにと願っているだけです。家にいる時でさえ、家族の夢が失われ、笑い声も消えました。今のイラクでは、平和や復興、文化の発展はまるで夢のようで望むことすらできません。未亡人、孤児、教育や仕事を得られない若者たちの事を考える時、心がとても痛みます。

だからこそ、日本の皆さんにお伝えしたい切実な思いがあります。武装勢力によって破壊された地域の復興や、人びとの心理面をサポートすることによって、イラクの人びとの傷ついた心は救われます。これからも日本の人たちが支えてくださることを心から願っています。

イラク／バグダッド事務所
ティクラ J.エリアス

ティクラさんへ

胸が締め付けられる思いで手紙を読みました。皆さんがこのような状況の中、文字通り命がけで職場に行き、地道に支援活動を続けていることに、本当に頭が下がります。

今のイラクの情勢を考えると、確かに希望を見いだすことは、難しいかもしれません。その中で、ティクラさんたちが変わらず活動を続ける姿が、どれ程人びとに安心感を与えているかと思うと、学校の修復や衛生教育は、支援活動の範囲をはるかに超えて、人びとの希望の光になっていると改めて確信しました。ティクラさんが人びとと共に普通の暮らしを取り戻せるように、日本にいる私たちも、心をこめて微力を尽くしていきますね。

JEN事務局長 木山啓子

石けん、ハブラシ、歯みがき粉などの『衛生キット』を配布するだけではなく衛生ワークショップを行います。